

想

「わかる」と「なじむ」

授業していくうれしい瞬間は「わかつた！」と生徒が言う（思う）瞬間です。

詩人の大岡信氏が「わかる」は「わける」が語源で「わかる」とは自分から遠ざけることだ」というような文章を書いておられました。「近づける」とじやなく「遠ざける」と「わかる」のか、と不思議に思った記憶があります。わかるということは全体を切り「分」けて、「分」析することでもあります。

国語でいえば品詞「分」解すること。たとえば「逢ひみてののちの思ひにくらぶれば昔はものを思はざりけり」（百人一首 敦忠）の「けり」は「詠嘆」だと品詞分解して「わかつた」氣になるのです。

でも品詞分解して「昔はもの思いをしていなかつたのだなあ」と口語訳してみても「わかつた」感からは遠い感じがしませんか？

というのは、この歌が心に響くのは、この歌が「もの思いをする」ことの「本当に気づいた瞬間」について歌っているからです。「もの思いをして過ごしてきた」と思つて、いた自分の浅はかさに気づくのは、人と出会つてからその人のことを思うようになつてからだったのだ」と。「わかつたはずなのに、本当にには「わかつて」

いなかつたのだ、と歌うのです。

わかつていたつもりのことが自分にわかるまでには「時間」がかかるものです。「わかる」のは「瞬間」の出来事です。私たちはその瞬間を積み重ねながら日々を送っています。

でも「わかつた瞬間」が「本当にわかる」にまで転化するにはそれなりに時間がかかるものです。

授業者としての本当の喜びは生徒が「わかつた」という瞬間よりも、わかつたことが生徒の中でそれなりに時間をかけてその人に「なじむ」ところにあります。そのことに気づいたのは勤めて20年以上経つた頃でしようか。やはり「わかる」には時間がかかるものです。

愛知淑徳は110年を迎えるました。

「なじむ」には「味がよくなる」の意味もあります。

